

安芸国分尼寺跡

— 伝承地にかかる第3次調査概報 —

1 9 8 0

広島県教育委員会

安芸国分尼寺跡 正誤表

頁	行	誤	正
(挿図目次)	(第8図)	断面図	断面実測図
(図版目次)	(図版3 b)	同上竈立柱	同上竈立柱
1	8	発掘調査	発掘調査
2	7	新に	新たに
	9	安芸国分寺跡	安芸国分尼寺跡
	21	呼ばれている	呼ばれていた
	24	竈立柱跡	竈立柱跡
	26	納力地区には	納力地区では
3	9	国分寺木	国分寺木
4	7	竈立柱	竈立柱
5	15	未成地区	未成南地区
7	(12月11日)	竈立柱	竈立柱
	(12月15日)	竈立柱	竈立柱
	(12月17日)	掘り下げ	掘り下げ
8	(1月9日)	(土)	(水)
10	(第7図)	(1:3)	(1:30)
11	1	B-B'土層断面図	B-B'土層断面図
	15	竈立柱	竈立柱
13	(第9図)	(1)	(1)
17	6	竈立柱建物跡	竈立柱建物跡
	7	竈立柱遺構群	竈立柱遺構群
		土師質土器	土師質土器
18	1	竈立柱建物跡	竈立柱建物跡
	2	口縁をもっており	口縁をつけており
	18	竈立柱建物跡	竈立柱建物跡
	22	竈立柱遺構群	竈立柱遺構群
(図版3 b)		同上竈立柱	同上竈立柱
(図版12)		各地区調査区	a 各地区調査区
付図		安芸国分尼寺跡指定範囲	安芸国分寺跡指定範囲

目 次

I	はじめに	(1)
II	調査の概要	(2)
1.	既往の調査	(2)
2.	調査の経過	(3)
	調査日誌抄	(7)
III	検出の遺構	(9)
IV	出土遺物	(17)
V	まとめ	(23)

挿 図 目 次

第1図	安芸国分尼寺跡伝承地付近地形図(1:2500)	(折込)
第2図	露掛西地区調査区配置図(1:1000)	(3)
第3図	平田地区調査区配置図(1:1000)	(4)
第4図	鷺田地区調査区配置図(1:1000)	(5)
第5図	各調査区断面実測図(1:80)	(6)
第6図	露掛西第3-a調査区遺構実測図(1:100)	(9)
第7図	露掛西第3-a調査区住居跡状遺構・遺物出土状態(1:30)	(10)
第8図	露掛西第3-a調査区東壁・北壁断面図(1:40)	(11)
第9図	露掛西第7調査区遺構実測図(1)(1:80)	(13)
第10図	露掛西第7調査区遺構実測図(2)(1:80)	(折込)
第11図	平田第1調査区遺構実測図(1:50)	(16)
第12図	鷺田第1調査区遺構実測図(1:80)	(16)
第13図	露掛西第3-a調査区出土土器実測図(1)(1:3)	(20)
第14図	露掛西第3-a調査区出土土器実測図(2)(1:3)	(21)
第15図	各調査区出土土器実測図(1:3)	(22)

図 版 目 次

- 図版 1 a 露掛西地区近景(西より) b 同 上(東より)
- 図版 2 a 露掛西第3 - a 調査区遺物出土状態(東より)
b 同 上(北より)
- 図版 3 a 露掛西第3 - a 調査区建物跡(西より) b 同 上掘立柱
- 図版 4 a 露掛西第7 - a 調査区遺構(東より) b 同 上(西より)
- 図版 5 a 露掛西第7 - c, d 調査区遺構(北より) b 同 上(南より)
- 図版 6 a 露掛西第7 - b 調査区遺構(西より)
b 露掛西第7 - d 調査区1号井戸(西より)
- 図版 7 a 平田地区近景(西より) b 同 上第1調査区土壇(東より)
- 図版 8 a 鷺田地区近景(東より) b 鷺田第1調査区建物跡(北より)
- 図版 9 a 末成南地区近景(北より) b 西薬寺地区近景(東より)
- 図版10 露掛西第3 - a 調査区出土須恵器
- 図版11 露掛西第3 - a 調査区出土須恵器, 土師器
- 図版12 a 各地区調査区出土土師質土器 b 同 上

例 言

- I 本概報は、昭和54年12月3日から昭和55年1月26日までの間に実施した安芸国分尼寺跡伝承地の第3次調査概報である。
- II 発掘調査は国庫補助金の交付を受け、広島県教育委員会が実施した。
- III 本概報の執筆は、I・II・Vを松村昌彦、IIIを桑田俊明、桑原隆博、松村昌彦、VIを小都隆の分担により、松村が編集した。
- IV 出土遺物の写真撮影は中田昭が行った。その他、出土遺物の復元、実測、図面の整理・製図等は、上記の者のほか文化課職員が行った。
- V 本概報に使用した方位はすべて磁北である。
- VI 遺構表示記号は次のとおりである。
溝状遺構：M，柱穴或はピット：P，溜池状遺構：S，井戸：E
- VII 挿図の第5図に示す土層名は第2次調査概報のものに準拠し一部を修正した。

I はじめに

安芸国分尼寺跡は、これまで国分寺跡東方の「にんじ（尼寺）堂」付近に存在していると伝承され、遺構が明らかでないまま今日に至っている。このたびの発掘調査は、この尼寺跡伝承地と国史跡として公有化を進めている安芸国分寺跡との間に東広島市土地改良区によって圃場整備計画が立てられ、その事業が現在進められていることと、周辺部の宅地化が急激に進行していることもあって、早急に尼寺跡の遺構や寺域の実態を確認し、その状態によっては保存を講ずるため、3ヶ年計画で昭和52年度から国庫補助金の交付を受けて発掘調査を実施しているもので、今年度はその最終年次にあたる第3次調査である。

第1次調査は、圃場整備予定地のうち「にんじ（尼寺）堂」付近から開始したが、礎石など尼寺跡とみられる遺構は確認することはできなかった。しかし、「にんじ堂」から西に約130mの第9・10調査区では、木簡、瓦類、須恵器類の出土、溝状遺構、基壇状遺構が存在した。このため昨年度の第2次調査は、国分寺跡と第1次調査地との間の納力地区について実施し、木製品、陶磁器類などの遺物や溝状遺構、溜池状遺構、杭列などを確認したが、尼寺跡とみられる有力な手がかりを得ることはできず、むしろ中世関係の遺構が集中することが知られた。

第3次調査にあたる今年度は、国庫補助金125万円、県費負担金125万円の計250万円で昨年度調査の北側にあたる露掛西地区、第1次調査区の北側にあたる西楽寺地区、その南側の平田地区、尼寺跡伝承地の東側にあたる末成北、鷺田地区、その南側の末成南地区について、昭和54年12月3日から昭和55年1月26日までの約2ヶ月間にわたって実施した。

発掘調査は県教育委員会文化課職員が担当し、東広島市教育委員会、東広島市土地改良区、土地所有者である桑田二郎・那須春夫・高橋義則・梶原幸雄・佐々木義明・中義治・吉崎正行・久田積・久田勝・高橋正・岡光年秋・桧山昭・岡田亀雄の各機関及び各氏からの多大の御協力をいただいた。記して謝意を表したい。

Ⅱ 調査の概要

1. 既往の調査

安芸国分寺跡については、昭和7年11月に塔跡の発掘調査が行われ、昭和11年9月に安芸国分寺塔跡として史跡指定された。その後、昭和44年から昭和46年の3ヶ年間に県教育委員会が発掘調査を実施し、南大門・中門・金堂・講堂・北方建物跡・東方・西方・北方築地跡などの遺構が確認された。昭和52年6月にはこれらの遺構を含む寺域が新に追加指定され、昭和53年度からは指定地の一部公有化も進められ、保存対策が講じられている。

これに対して安芸国分寺跡については、古くから国分寺跡の東方約400mの「にんじ（尼寺）堂」付近であると伝承され民間有志による標識も建立されたりしたが、これまで瓦類の出土や礎石などの遺構も全く明らかにされていない。

昭和52年度の第1次調査は、国分寺跡指定地と尼寺跡伝承地との間の圓場整備予定地のうち、尼寺跡伝承地に近い一帯について19ヶ所のトレンチを設定して実施した結果、尼寺跡伝承地付近のトレンチにはこれに伴う遺構、遺物は確認されなかった。しかし尼寺跡伝承地から約130m西方の第9・10調査区では溝状遺構、基壇状遺構が確認されたほか、瓦・須恵器、木簡、木製品などが出土し、第11～13調査区からは中世の溝状遺構、土城などが確認された。なお第9・10調査区の遺構が尼寺跡に伴うものであるのか否かについては調査地域が限定されたため明らかにすることはできなかった。

昨年度の第2次調査は、国分寺跡指定地と第1次調査地との間にあって中・近世に納力と呼ばれている圓場整備予定地について実施した。この地区は第1次調査の状態からみて、平安時代～中世の遺構が存在するのではないかと予想され、北側に設定した第1～3調査区では溜池状遺構・溝状遺構、杭列などを検出し、中央部の第6調査区では溜池状遺構、第7調査区では溝状遺構と堀立柱跡を確認した。また、南側の第8・9調査区には平安時代～中世の包含層が厚く堆積しており、旧地形は凹凸のある地形であったことが窺われた。このように納力地区には尼寺跡を窺わせる有力な手がかりを得ることができなかったが、この地区は少なくとも平安時代～中世には居住地及び田畑地であったと推察された。なお、昭和52・53年度の調査の概要については「安芸国分尼寺跡」第1次及び第2次調査概報として報告している。



图 1 安生园分尼寺拆迁补偿地籍地图 (1:2500)

52年度
 53年度
 54年度
 安生园分尼寺界限范围

に黄茶褐色粘質土がある。これは第3-a調査区の黄色粘質土に相当の土層とみられ、断面に柱穴を確認した。b区(2×20m)からは遺構は検出されなかった。

第2調査区 この調査区(2×30m)には第5層に黒みの強い暗灰色土が西に下っており地山に接して木製品が出土したほか須恵器、瓦類が出土し4層に瓦、3層に須恵器、土師質土器片が出土した。

第3調査区 a区(2×10m)の東側には黄色粘土層の上面が床面とみられ、直上に多数の須恵器、土師器をもつ遺構を検出したほか、焼土や獨立柱などが存在し、西側には溝状遺構と柱穴を確認した。b区(2×20m)の地山面は東にゆるやかに傾斜している。

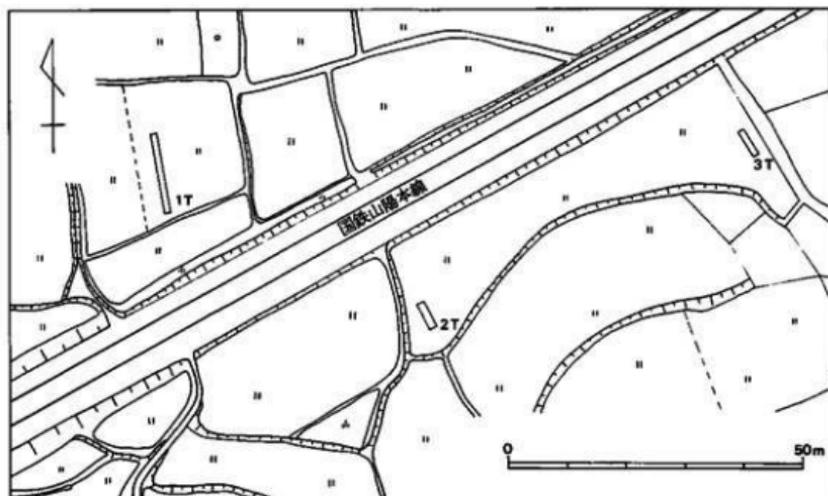
第4調査区(2×20m)、第5調査区(2×15m)、第6調査区(2×10m)このうち第4調査区は表土下はすぐに地山で、第5・6調査区はともに東にわずかに傾斜をみせており土層の状態は相似し、須恵器が若干出土したにすぎない。

第7調査区 a区(2×35m)、b区(2×35m)を設定し柱穴列を検出した。このほかa区では溜池状遺構、b区では溝、井戸を検出した。なお、a区に直交してc区(2×6.5m)とd区(2×12m)を設定し、柱穴群と井戸を検出した。出土遺物には瓦・須恵器のほか、須恵質土器、青磁、白磁、備前焼などが出土した。

これらのことからこの調査区の遺構の大部分は古代・中世頃のものと思われる。



第3圖 平田地区調査区配置図(1:1000)



第4図 鷺田地区調査区配置図(1:1000)

第8調査区 a区(2×15m), b区(2×15m), c区(2×8m), d区(2×6m)を設定した結果, 須恵器などが出土したが遺構は検出されなかった。

第9調査区 第7調査区の東に(2×7m)を設定したが, 東側は地山面が約60cmに落込んでおり, この堆積土の上部から溝とみられるものが掘込まれている。

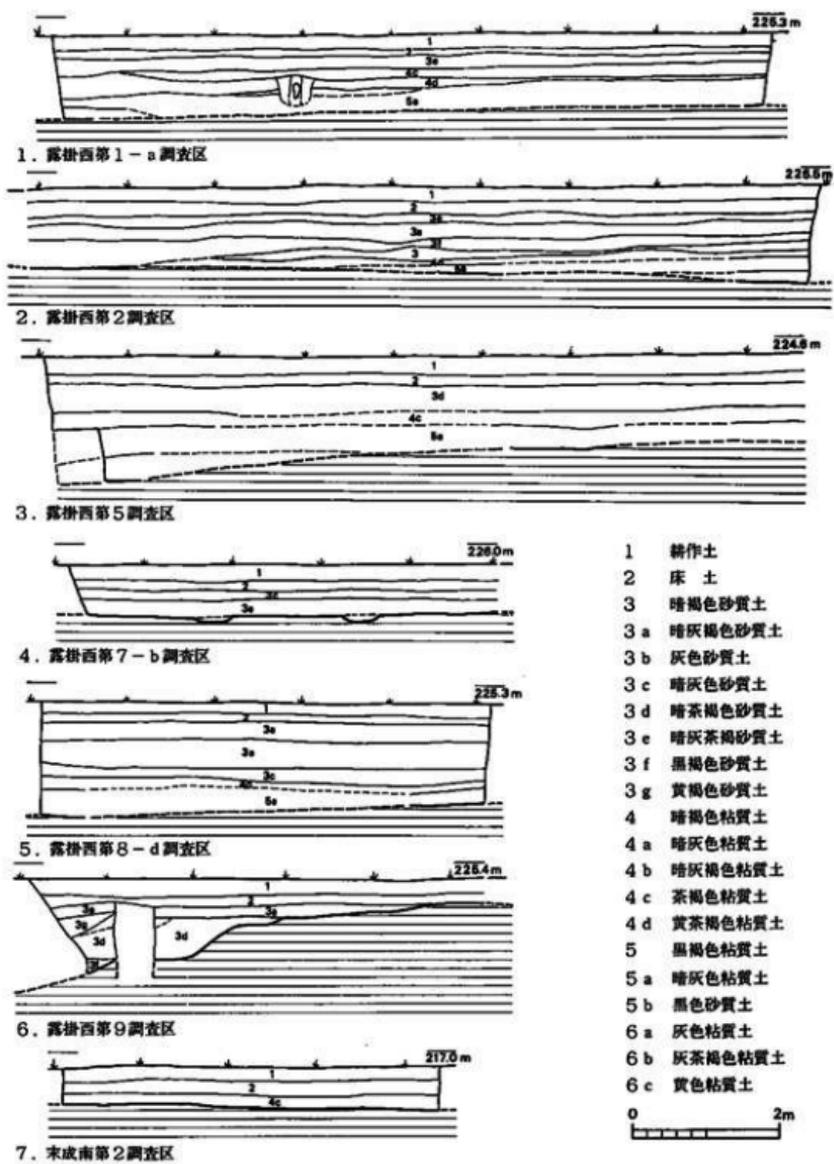
西楽寺地区 第1調査区(1×20m), 第2調査区(1×6m), 第3調査区(1×20m), 第4調査区(1×5m)を設定した。第2～4調査区はすぐに地山で, 第1調査区は南側に中世の包含層が認められた。

平田地区 第1調査区(1×7m)では大型の土壇を検出し, 第2調査区(1×9)の下層からは瓦, 須恵器, 土師質土器が少量出土した。

鷺田地区 第1調査区(1×14m), 第2調査区(1×5m), 第3調査区(1×5m)を設定し, 第1調査区では平安時代頃の建物跡とみられる柱穴例を検出した。第2調査区はすぐに地山で, 第3調査区は土師質土器の包含層が存在した。

末成北地区 第1調査区(1×10m), 第2調査区(1×8m), 第3調査区(1×10m)を設定した。第1・2調査区には遺物が若干出土したにすぎない。

末成地区 第1調査区(1×10m), 第2調査区(1×8m), 第3調査区(1×10m)を設定した。第1・3調査区はすぐ地山で, 第2・3調査区は第3層が中世の遺物包含層となっている。なお, この地区では他に須恵器, 瓦が出土している。



- 1 耕作土
 - 2 床土
 - 3 暗褐色砂質土
 - 3a 暗灰褐色砂質土
 - 3b 灰色砂質土
 - 3c 暗灰色砂質土
 - 3d 暗茶褐色砂質土
 - 3e 暗灰茶褐色砂質土
 - 3f 黒褐色砂質土
 - 3g 黄褐色砂質土
 - 4 暗褐色粘質土
 - 4a 暗灰色粘質土
 - 4b 暗灰褐色粘質土
 - 4c 茶褐色粘質土
 - 4d 黄茶褐色粘質土
 - 5 黒褐色粘質土
 - 5a 暗灰色粘質土
 - 5b 黒色砂質土
 - 6a 灰色粘質土
 - 6b 灰茶褐色粘質土
 - 6c 黄色粘質土
- 0 2m

第5圖 各調査区断面実測図(1:80)

調査日誌抄

昭和54年12月3日(月)晴

発掘調査器材を現地に搬入する。各調査地区の確認を行い、露掛西地区から調査区設定の検討を行う。

12月4日(火)曇のち小雨

露掛西第1調査区 a, b 区を設定し, b 区の調査を開始する。

12月5日(水)曇のち雨

露掛西第1調査区 a 区の排土作業を開始し, b 区は掘下げる。

露掛西第2調査区 排土作業を開始する。

12月6日(木)晴

露掛西第1調査区 下層の黒灰色土層があり, その上部に黄茶褐色粘質土層があり, 柱穴を確認する。

12月7日(金)晴

露掛西第4・5・6調査区 調査を開始する。

12月8日(土)晴

露掛西第3・7調査区 各a 区の調査を開始する。

12月10日(月)晴

露掛西第7調査区 b 区の排土作業を開始する。

同 第8調査区 調査を開始する。

12月11日(火)晴

露掛西第3調査区 a 区の東側に独立柱と多量の土器群を検出した。西側には南北に溝が延びており, この溝を追って南北に拡張区を設定する。

12月12日(水)晴

露掛第3調査区 土器群の清掃と溝を追う。

同 第4・5・6調査区 掘下げを続行する。

12月13日(木)晴

露掛西第3調査区 a 区の土器群の清掃を行う。

同 第7調査区 a 区に柱穴を確認のほか, 溜池状遺構を検出する。b 区にも柱穴を検出する。

12月14日(金)晴

露掛西第3調査区 a 区は土器群の写真撮影, b 区は土層断面図を作成する。

同 第4調査区 土層断面図を作成する。

同 第7調査区 a 区の柱穴群を追い, 溜池状

遺構を掘下げる。この柱穴や溜池状遺構は中世のものだと推定され, b 区には溝を確認する。

12月15日(土)晴

露掛西第3調査区 a 区の土器群, 掘立柱, 溝の写真撮影を行う。b 区は土層断面図を作成する。

同 第5調査区 土層断面図を作成する。

同 第7調査区 a 区は柱穴の確認を進める。

同 第8調査区 a 区の掘り下げを続行する。

12月17日(月)晴

露掛西第1調査区 a 区は地山面まで掘り下げ, b 区は土層断面図を作成する。

同 第3調査区 a 区は土器群を追って東北側を拡張する。b 区は土層の再検討を行う。

同 第7調査区 a 区に直交してc・d区を設定し柱穴の確認を進める。

同 第8調査区 a・c 区の掘り下げを続行する。

12月18日(火)晴

露掛西第3調査区 a 区の清掃を行う。

同 第7調査区 c・d 区は柱穴を確認する。

同 第8調査区 a・c 区の作業を続行する。

12月20日(木)晴

露掛西第1調査区 a 区の土層断面図を作成する。

同 第3調査区 a 区は土層断面図を作成し, b 区は埋めもどす。

同 第8調査区 d 区の排土作業を開始する。

同 第9調査区 排土作業を開始する。

12月21日(金)曇のち雨

露掛西第3調査区 a 区は清掃を行い, b 区は埋めもどし作業を行う。

同 第5調査区 埋めもどし作業を行う。

昭和55年1月5日(土)晴

各調査区の排水作業を行う。

1月6日(日)晴

排水作業を続行する。

1月7日(月)曇のち晴

露掛西第1調査区 a, b 区を埋めもどす。

同 第2調査区 土層断面図を作成する。

1月8日(火)晴のち曇

露掛西第2調査区 埋めもどしを行う。

同 第3調査区 a区清掃を行う。

調査区配置図を作成、各調査区の写真撮影を行う。

1月9日(土)曇のち雪

露掛西第2調査区 埋めもどしを終了する。

同 第4調査区 埋めもどしを行う。

同 第8調査区 a、d区の土層断面図を作成。

1月10日(木)晴

露掛西第6調査区 埋めもどしを行う。

同 第7調査区 a区土層断面図を作成。b区は排土作業。d区は柱穴の確認作業を行う。

同 第8調査区 c区の埋めもどしを行う。

1月11日(金)晴

露掛西第3調査区 a区北側拡張区の土層断面図を作成する。

同 第7調査区 b区を清掃し、柱穴、溝、井戸を確認し、土層断面図を作成する。d区は南に拡張し井戸、柱穴を確認する。

同 第8調査区 b区の排土作業を開始する。

同 第9調査区 土層断面図を作成する。

1月12日(土)晴

露掛西第3調査区 土器群の写真撮影、土層断面図の作成などを行う。

同 第7調査区 柱穴の確認を進める。

同 第8調査区 a区の埋めもどしを行う。

1月16日(水)雪のち曇

露掛西第3・7調査区 遺構図作成のため杭を打つ。

同 第8調査区 b区は掘り下げ、d区は埋めもどしを行う。

1月18日(金)晴

露掛西第3調査区、a区平面図の作成を行う。

同 第8調査区 土層断面図を作成する。

末成北第1～3調査区 調査区を設定し、この地区の調査を開始する。

鷺田第1調査区 この地区の調査を開始する。

同 第2調査区 すぐ地山のため埋めもどす。

同 第3調査区 中世の包含層を確認する。

1月19日(土)晴

露掛西第3調査区 a区の出土土器の実測を行う。

末成北第1・2調査区 掘り下げを続行する。

鷺田第1調査区 清掃を行い、柱穴を確認する。

1月21日(月)雪のち晴

露掛西第3調査区 a区出土土器を取り上げる。

同 第7調査区 遺構実測の準備を行う。

西楽寺第2～4調査区 この地区の調査を開始するが、いずれもすぐに地山である。

1月22日(火)晴

露掛西第3調査区 a区出土土器群の下を掘り下げて柱穴、焼土などを確認する。

同 第7調査区 遺構図を作成する。

西楽寺第1調査区 この調査区の南側では若干遺物が出土した。第3・第4調査区は中世の包含層があるが第4調査区はすぐに地山のため埋めもどしを行う。

1月23日(水)晴

露掛西第3・7調査区 遺構の写真撮影を行う。

末成北第1・2調査区 埋めもどしを行う。

末成南第1～3調査区 第1調査区はすぐに地山である。この地区の埋めもどしを行う。

鷺田第1調査区 遺構を実測する。

1月24日(木)晴

西楽寺第1調査区 埋めもどしを行う。

鷺田第1調査区 遺構の実測、写真撮影を行なう。

平田第1・2調査区 調査を開始する。

1月25日(金)晴

露掛西第7調査区 埋めもどしを行う。

鷺田第1調査区 実測を終了し、第3調査区とともに埋めもどす。

鷺田第1調査区 遺構の実測を写真撮影を行なう。

平田第1・2調査区 調査を開始する。

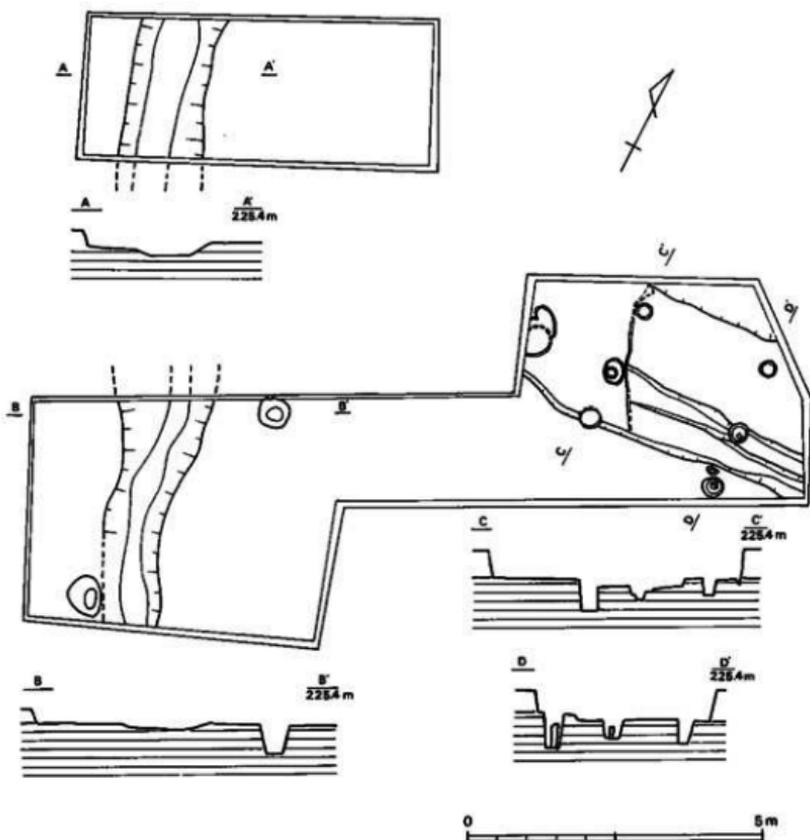
1月26日(土)晴

平田第1調査区 露掛西第3調査区のa区の実測、写真撮影、埋めもどしを行い調査を終了する。

Ⅲ 検出の遺構

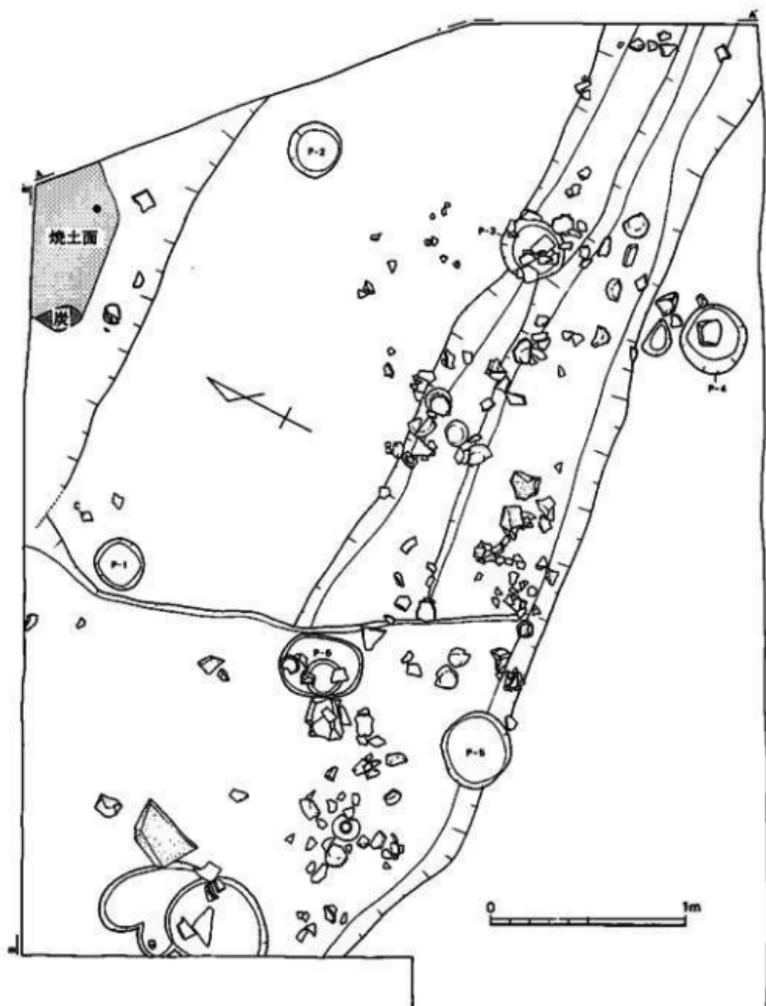
露掛西第3調査区の遺構 (第6・7・8図)

第3-a調査区内の東側に須恵器、土師器の土器群と住居跡遺構を検出し、西側には溝と柱穴とみられるピットを検出した。土器群は、調査区の東隅から西に幅約1m程度で帯状に拡がっており、この区の北西に設定した北拡張区には若干の遺物が存在したが土器群としてのまとまりはないため、その範囲は調査区の東半を中心とする部分に限られるようである。



第6図 露掛西第3-a調査区遺構実測図(1:100)

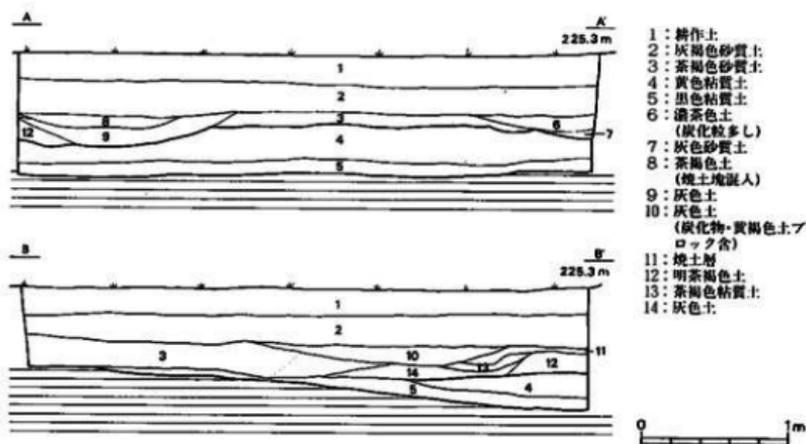
これらの土器群に伴う遺構として当初は遺物の出土状況や土器群に平行する段差などから溝状遺構を予想した。しかし、掘り下げの結果、土器出土層の直下に堅くしまった黄色粘質土層を検出し、更にそれを掘り込んで幾つかのピットを確認した。黄色粘質土層は、東側では平均して25cm前後の厚さで堆積しており、西に向って次第に薄



第7図 露掛西第3-2調査区住居跡状遺構・遺物出土状態 (1:3)

くなっている。これは第8図B—B土層断面図にみられるように地山が東方向へ傾斜し30cm余りも下降していることと関係している。すなわち、調査区東側の黄色粘質土層上面は西側の地山面とほぼ同じ高さになっており、この土を地山の低い部分に埋める形となっている。そして、この黄色粘質土層上面は3条の浅い溝により部分的に削平されながらも全体に水平を保っている。このような状況から黄色粘質土は貼床もしくは地形のため人為的に埋め込まれたものと考えられる。なお、土器が集中する部分には東西に走る2条の小溝を検出したが非常に浅く西にいくに従って不明瞭となっている。

この黄褐色土上面からの3つのピットを検出した(第7図—P1~P3)。P1は径、深さとも約30cm、P2は径約30cm、深さ約40cmを測り、いずれも明灰色粘質土が流入している。P3は径30~35cm、深さ30cmで灰色粘土が流入している。これらのピットの本来的の切り込み面は、当区ではⅢ層以下であるが湧水が著しいため遺構面の十分な観察が困難で、4層上面では確実に認められたⅢ層から掘り込まれた可能性も若干残されている。一方P4・P5はⅢ層の茶褐色砂質土上面より掘り込まれたピットである。P4は径35cm深さ60cm、P5は径35cm深さ55cmを測る。流入土は双方とも明灰色粘質土である。P4は一辺10cm前後長さ40cmの角に近い堀立柱が出土した。同様にP2でもP1ほど遺存はよくないが柱材の一部とみられる木片が多数出土した。このこ



第8図 露骨西第3-a調査区東壁・北壁断面実測図(1:40)

とからこれらのピットは同時期の柱穴と思われる。P6は長径40cm短径30cmの楕円形のピットで流入土はP1・P2などと共通するが、深さはやや浅い。中央南寄りに径20cm深さ20cmの小ピットがあり黒色土が流入している。

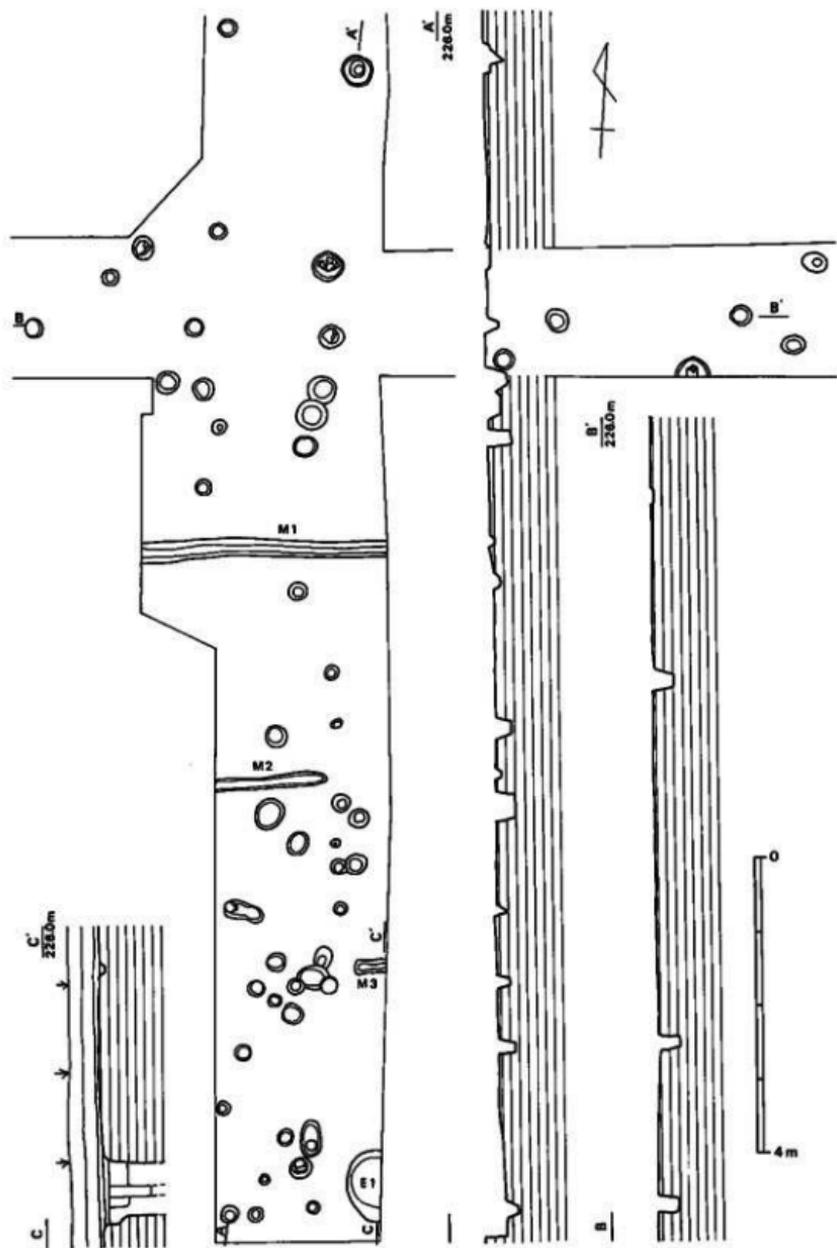
以上のピット群のあり方より一応P1—P2—P4—P5を柱穴とする建物跡が想定される。全体の規模についてはトレンチ発掘のため不明であるが、柱間は2.4m前後で対応する柱穴の方向はほぼ東西および南北にあたっている。しかし柱穴の切り込み上面が一致しないことや埋め込み切り込み上面が一致存在などとの関係からすると矛盾する点もあり上述の建物の存在を断定することはできない。したがって複数の建物の可能性もある。なお、当区北東隅では炭化物を含む焼土面が検出されたが、層位的には黄色粘質土より上層である。

遺物は、層位的には客土下の茶褐色砂質土および濃茶色土より出土した（第8図—3層・6層）。土器は完形もしくはそれに近い状態のものが多くを占め、遺存は良好であった。脚台付きの須恵器が多いが、平行叩き目をもつ土師器の甕も数点出土している。これらは時期的には平安時代中葉に属するものである。また、小片ではあるが土器よりやや離れて緑釉陶器の胴部破片が出土した（第7図—C）。その他、量的にはさほど多くはないが布目瓦（平瓦）の破片が土器に混って点在している。

調査区の西側において検出した溝は幅0.9～1.6m、深さは地山面から10～20cmで、溝内には炭化粒を含む灰茶褐色砂質土が流入し、須恵器類が出土した。この溝は南北両拡張区に続いているが幅は北側になるほどやや広く、レベルは北拡張区の部分が南拡張区の部分より約10cmも低い。地形的にも南側が低くなることから、水が流れていたとすると北から南に流れていたといえるが、溝の確認は一部であり、東側の住居跡状遺構との関係は明らかではない。なお、第3—b調査区内には溝は検出されていない。このほか溝に接して2個のピットを検出した。南側のものは須恵器（甕）の破片を伴い径約60cm、深さは地山面から約40cmである。他の1個は溝から約80cm離れており径約55cm、深さは地山面から約50cmで、ピット内には中央部が黒みの強い褐色土、その周囲は灰色及び黄灰色土であることから柱穴とみられる。

露掛西第7調査区の遺構（第9・10図）

本調査区は国分寺跡指定地の東北方にあたる広い平坦地であり、国分寺跡との関係が予想されたためa、b調査区を設定し、両調査区にピット列、溝などを検出した。



第9图 露山西第7调查区遗址实测图(1) (1:80)

また、a調査区のピット列の性格を確認するため、これに直交してc、d調査区を設定し、多数のピット、溝のほか井戸を確認した。

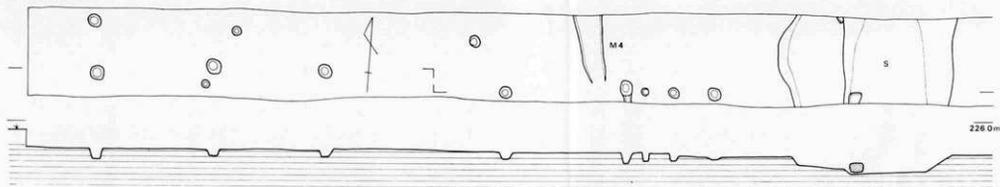
a、c、d調査区内には床土直下からピット66、井戸1、溜池状遺構1、溝状遺構4を確認した、ピットの大部分は柱穴とみられ、径5～50cm、深さは地山面から5～30cmである。なお、ピットは径30cm、深さ15～20cmのものが大部分であるが、非常に浅いもの、二段になるもの、礎石を据えるものなどがある。これらのピットの分布は、a調査区の溜池状遺構から西側部分、トレンチの交差する付近、d調査区に集中する傾向がみられ、a調査の東端、c調査区の北端は粗である。なお、これらのピットは建物跡の柱穴及び欄列とみられるが規模及び状態については不明である。

a調査区の西側部分に確認のピットのうち調査区西端には2.4m間隔で3個のピットが並ぶ。トレンチ交差する付近にも東西方向に2.0～2.5m間隔に並ぶ柱穴列とみられるものがあるほか礎を礎石とするピットがいくつか存在している。とくにトレンチが交差する場所にある2個は2.5mの間隔で、北側にある二段のピットとは2.7m離れて直交しており建物跡の可能性が高い。このほかに礎石を有するピットは他のピットとの組合せや規模は不明であるが建物跡に伴うものとみられる。a調査区に直交して南に設定したd調査区のピットは3～4単位のグループに分けることができ、一群内に7～8個のピットがあって建物跡としての組合せが可能であり、建て替えや、時期差があるとみられる。

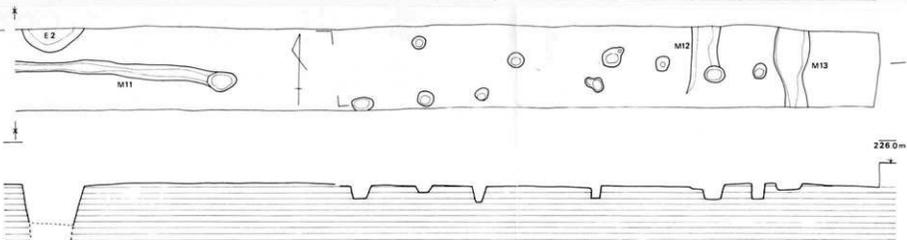
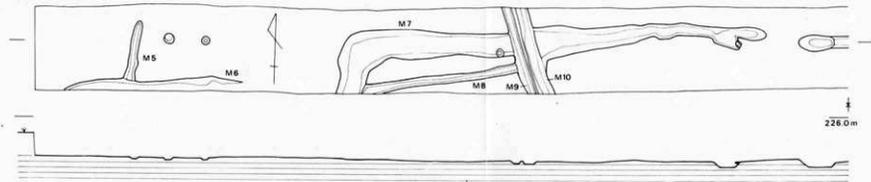
井戸(E1)は円形を呈し、径約1.0m、深さ2m以上である。この中の土層は暗灰色土を基調とし、上層は砂質土、下層は粘性が強い。上面は意図的に埋められたようで平行堆積の灰褐色砂質土で区別される。なお、中央部に径約16cmの柱穴状を呈する黒褐色の砂混りの粘土質の部分がある。ただ柱穴とするには埋没土の状態、柱の深さに差異があり、むしろ草戸千軒町遺跡の井戸等で知られているような井戸中央部に竹を押し立てた呪儀を推察させるものである。

溜池状遺構(S)は全体の規模は不明であるが、東西の長さは3.7mを測り、深さは地山面から30～35cmを測る。西側は段を有しており、幅1.2mのテラス面がある。上端の東西幅は3.7m、底面幅は1.1～1.6mで南側に幅広くなっており、南北に延びる溝状遺構にも見えるが、約13m離れたb調査区にはこの遺構は延びていないことから溜池状の遺構とみられる。堆積土は灰色を基調とした砂質土で3層に分層でき、遺構内

第7-a调查区



第7-b调查区



0 4 m

第100图 露排西第7调查区造构实测图(2) (1:80)

からは比較的大きな角礫、瓦片、須恵器、備前焼などが出土した。

溝状遺構は *d* 調査区に M1～M3、*a* 調査区の溜池状遺構の西側に M4 を確認した。M1～M3 は東西方向に延びる幅15～30cm、深さ5～10cmである。M4 は南北方向に延びる幅50～60cm、深さ約7cmであるが南端で途切れている。

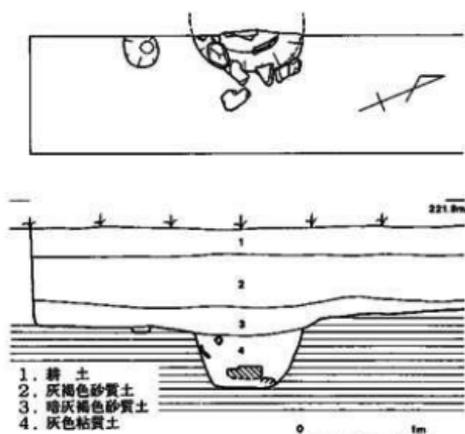
b 調査区には現地地表下50cmに厚さ約20cmの遺物包含層である 3 *e* 層の暗灰茶褐色砂質土があり、この下に遺構確認面の地山がある。この調査区ではピット17、井戸1、溝状遺構9を検出した。ピットは径30～45cm、深さ20～35cmの円形で大部分は柱穴とみられ東側に集中している。このうち東西方向に2.0～2.5mの間隔に並んでいるものがあることから3間以上の建物を想定することができる。また、これらのピットの近接状態からみて建て替えや時期差による数棟分の建物を想定することができるが *a*、*c* 調査区との間は未調査のため規模等については不明である。

井戸(E2)は径約130cm、深さ2m以上の円形プランを呈する。井戸内には灰色及び暗灰色粘質土が堆積している。

溝状遺構は M5、9、10、12、13が南北方向、M6、7、8、11が東西方向に延びている。このうち M7 と M11 は本来1本の溝である可能性があり、M7 は幅20～60cm、深さ5～10cmで西側で南に直角に曲っている。M6 と M7 も本来は1本の溝である可能性があり、M6 は幅15～20cm、深さ6～8cm、M7 は幅推定約30cm、深さ8～15cmである。M9 と M10 は並走しており、M9 は幅約36cm、深さ10～15cm、M10 は幅20～25cm、深さ約10cmで M7、8 と切り合い関係にあり、土層の状態からは先後関係は明確にすることはできないが M9・10 がやや深く切り込んだ状態にある。M12、13 は幅60～70cm、深さ5～12cmで、M12 は南端で止切れており、M13 は幅が狭くなる。これらの溝状遺構の性格やピットとの関係については明らかではないが、井戸(E1、E2) は本調査区内の柱穴例と直接関係を有するとみられる。また、これらの遺構の時期は出土遺物からみて平安時代—中世頃とみられる。

平田第1調査区の遺構（第11図）

本調査区の南端付近で確認した大型の土壇は、第3層の灰褐色砂質土の下の地山面を掘り込んで作っている。この調査区及び第2調査区の第2層は床土面がなく、国分寺瓦、須恵器、土師質土器、常滑焼片などを含む厚さ約40cmの層である。第3層の灰褐色砂質土は北側に薄く、南側では厚さ約20cmとなっているが、第2層の変化したも

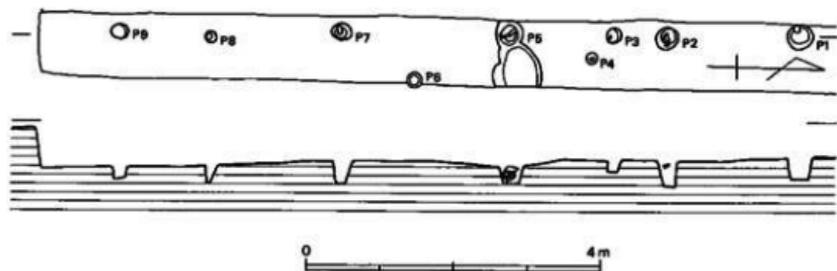


第11図 平田第1調査区遺構実測図(1:50)

のであろう。土坑の推定径は90～100cmで、地山面からの深さは約60cmで、底面は径約50cmの円形を呈し平坦である。周囲には長さ20cm前後の石を置いており、底には周囲から落ち込んだとみられる石がある。なお、この遺構内からは土師質の播鉢の底部が出土しており、時期的には中世のやや新しい頃とみられる。

鷺田第1調査区の遺構(第12図)

本調査区のピットは現表土下約20cmにある厚さ5～15cmの第3層の暗褐色砂質土の下にある地山面で検出した。なお、第3層からは少量の土師器のほか須恵器が出土した。柱穴とみられるピットは径30～35cm、深さは地山面から25～35cmで180～220cmの間隔に南北方向に並んでいる。P1～P3とP7からは須恵器、土師器片が出土し、P5には3個の礫を入れて礎石としている。P8の径は約15cmで断面V字形に先が尖り他の柱穴とはやや異っているがP7とは1.8m離れており、P1とP2の柱間と同じ長さにとる。なお、P9はP8から約1.2m離れている。このことから建物跡はP1・2・5・7とすると梁又は桁行は3間で、P8を入れると4間である。なおP9にはこの建物跡に伴うものか否かは明らかではないが、第1調査区付近は地形的にみて、このほかに別の建物跡が存在しているとみられる。



第12図 鷺田第1調査区遺構実測図(1:80)

IV 出土遺物

今次調査では、各調査区から須恵器、土師器などの土器類、緑釉陶器、灰釉陶器、中国陶磁、備前焼、伊万里焼、唐津焼などの陶磁器類などの他、瓦類、土製品類、木製品類、金属製品類などが出土している。このうち比較的まとまった状態で遺物が出土したのは露掛西区の第3調査区と第7・8調査区および鷺田地区である。露掛西第3調査区では平安時代の堀立柱建物跡から多量の須恵器、土師器が一括して出土しており、第7・8調査区では堀立柱遺構群に伴って鉢、鍋を主体とした土師質土器細片が集中して出土している。

露掛西第3調査区（第13、14図）

多量の須恵器に伴って、黒色土器、土師器、瓦、緑釉陶器が一括して出土した。

須恵器 須恵器は全出土量の約9割を占め、器種には蓋、坏、台付坏、皿、提瓶、壺、甕がある。焼成はいずれも堅緻で色調は灰色、暗灰色を呈し、胎土には細粒を含む。

蓋（1～3）は、口径15～16cm、高さ2.5～2.7cmの内に含まれる規格品が多く、他には口径17～18cmのやや大型品がある。天井部は平坦で、口縁部へは直線的にのび端部は屈折させている。天井部はヘラ切り、他は全面水ヒキで調整している。坏（4～12）は、口径13～14.4cm、高さ3.3～3.5cmの規格品で底部は平坦で、口縁部へは斜上方に直線的にのびるもの（4～10）と、やや内湾するもの（11・12）があり、後者は概して器高が低い。低部はヘラ切り、他は全面水ヒキ調整している。台付坏（13～18）は坏よりやや大形で、口径14.8～15.5cm、高さ4.5～5.7cmを計る。底部は平坦で断面箱形の高台を貼付けている。体部は直線的に斜上方にのびるが13、14のようにやや内湾ぎみのものもある。底部はヘラ切りで、高台は貼付ののちナデ、他は全面水ヒキ調整である。皿（19～25）は、口径13.4～14.3cm、高さ1.9～2.4cmの法量をもつ。底部は平坦で断面三角または箱形の高台を貼付けている。口縁部は斜上方に直線的にのびるが傾斜はゆるやかで、深さは0.9～1.7cmと浅い。底部はヘラ切りで、高台は貼付けの後ナデ、他は全面ミズヒキ調整である。その他には提瓶、壺、甕などがある。提瓶は肩部に稜をもつ扁平なものらしく、それについた、板状の粘土を幅3cmにヘラで削り、側面L字状にした把手がある。壺は平底で底径の小さいものがあり、甕には外面に格子目、内面に青海波のタタキメを施したものがみられる。なお、26はこれらの出

土した堀立柱建物跡の西方約10mにあるピット中から単独に発見されたもので、肩の張った器体に口径11.4cmの直口ぎみの口縁をもつており、口縁端部はやや尖りぎみである。内外面とも横方向のナデがみられ、外面にはこの他に部分的に縦方向のナデがみられる。

なお、これらの出土構成比は、坏が全体の約半数を占め、蓋、台付坏、皿がそれぞれ1割強、その他が約1割弱という比率である。また、蓋、坏、台付坏には底部内面を平滑にした転用硯も数点出土している。

黒色土器 (27～30) 黒色土器は椀形のみで8個体以上がある。口径は12.5cm, 15cm, 17.5cmと3段階の大きさがあるが高さは4～5cmと一定している。底部は平坦で断面三角形の高台がつき、体部は内湾する。内外面ともナデののちヘラミガキしているが、内面は特に顕著で光沢のあるものもみられる。内面は黒色で、外面は口縁部を除き黄褐色を呈す。

土師器 (31～33) 土師器には、大小の差はあるもののほぼ同形の3種の鉢がある。30は球形の器体にくの字状の口縁をつけた口径15cm、高さ推定11cmの小型鉢で、外面台は頸部以下全面に平行タタキメ、口縁部はヨコナデがみられる。また胴部内面はナデている。31は口径19cm、高さ推定16cmの中形品で、調整は30とほぼ同様ながら器壁は極めて薄い。32は口径21cmの大形品で、調整は30、31にほぼ同様である。

これらは先述のように堀立柱建物跡からの一括遺物であるが、現在のところ県内では他遺跡においても類例は極めて少なく、時期の決定は困難である。ここでは須恵器の器種、形態や黒色土器の伴出などから一応平安時代中頃に比定しておきたい。

露掛西第7・8調査区(第15図34～45)

堀立柱遺構群に伴って細片ながら多数の土師質土器片、陶器片、中国陶磁片が出土した。

土師質土器 土師質土器には鉢、鍋、釜、甕、坏などがある。鉢(34～36)は、口径30cm前後の大きな平底に内湾ぎみの口縁部をつけたもので、口縁端部は肥厚させている。外面はナデ、内面は丁寧なヨコナデ調整をしており、内面には放射状にカキメを施したものが多い。なお口縁端部は肥厚させず、やや下位に断面三角形の凸帯を貼付けたものもある(36)。鍋(37～40)は、直立または内湾ぎみの口縁部外側に水平に近くツバを貼付けたもので、内面はヨコハケメ、外面はナデであり、ほぼ全面にススが

付着している。釜(40)は、内傾する口縁部の外側にツバを貼付けたもので、調整は鍋と同様である。甕(41)は、ふくらんだ器体に外傾した口縁部をつけたもので、胴部外面には格子タタキメ、内面にはヨコハケメがみられる。なおこの種の甕は亀山焼の系統をひくもので、瓦質に近い。坏(42)は、口径11cm、高さ3.5cmのロクロ整形のもので底部には糸切がみられる。

陶器 陶器には備前焼がある。外傾した口縁部には玉縁をつけたもので、備前焼特有の赤褐色をしたものの他、灰色のものもある。(43, 44)

中国陶磁 45は竜泉窯の青磁碗底部で、内外面とも厚い釉がかかるが、胎土は黄褐色で良質ではない。この他白磁片が数点ある。

これらは一応中世の遺物とすることができるが、鍋、坏とも類例は少なく、伴出の甕などから考えると近世に近い時期のものと考えられる。

鷺田地区(第15図46~50)

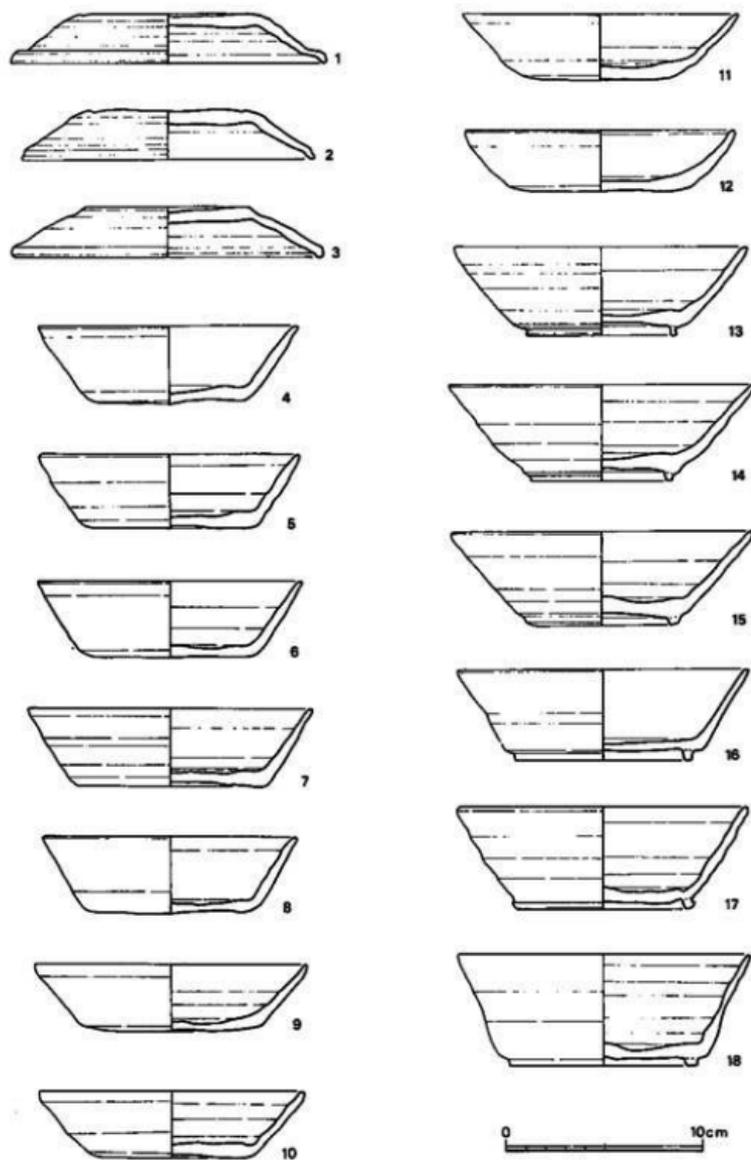
西側の第1調整区から須恵器、東側の第3調整区から土師質土器が出土している。

須恵器 須恵器には蓋・坏・甕などがある。坏(47)、蓋は露掛西地区出土のものと同様で同時期のものと考えられる。甕(45)は、肩の張った器体に外反する口縁部をつけたもので端部はナデで尖らず。胴部外面は格子タタキ、内面には青海波のタタキがあり、口縁部は内外両面ともナデている。

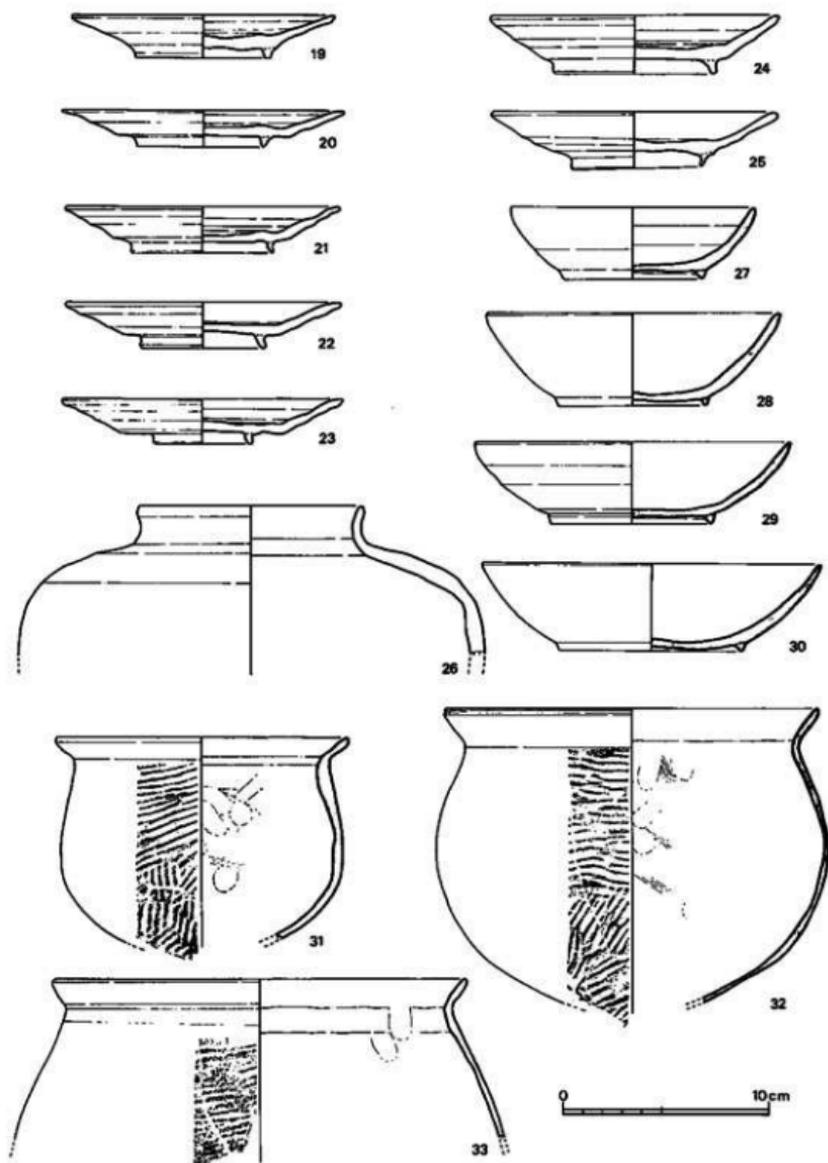
土師質土器 土師質土器には坏、鉢、鍋、釜がある。48はロクロ整形の坏で、底部は糸切りである。鉢、鍋は露掛西地区出土のものに類似している。49、50は釜で球形の器体に直立する口縁をつけている。外面はナデ、内面はヨコハケメがみられる。この種の釜は中世でも末期のものと考えられる。

その他の地区出土の遺物(第15図51~58)

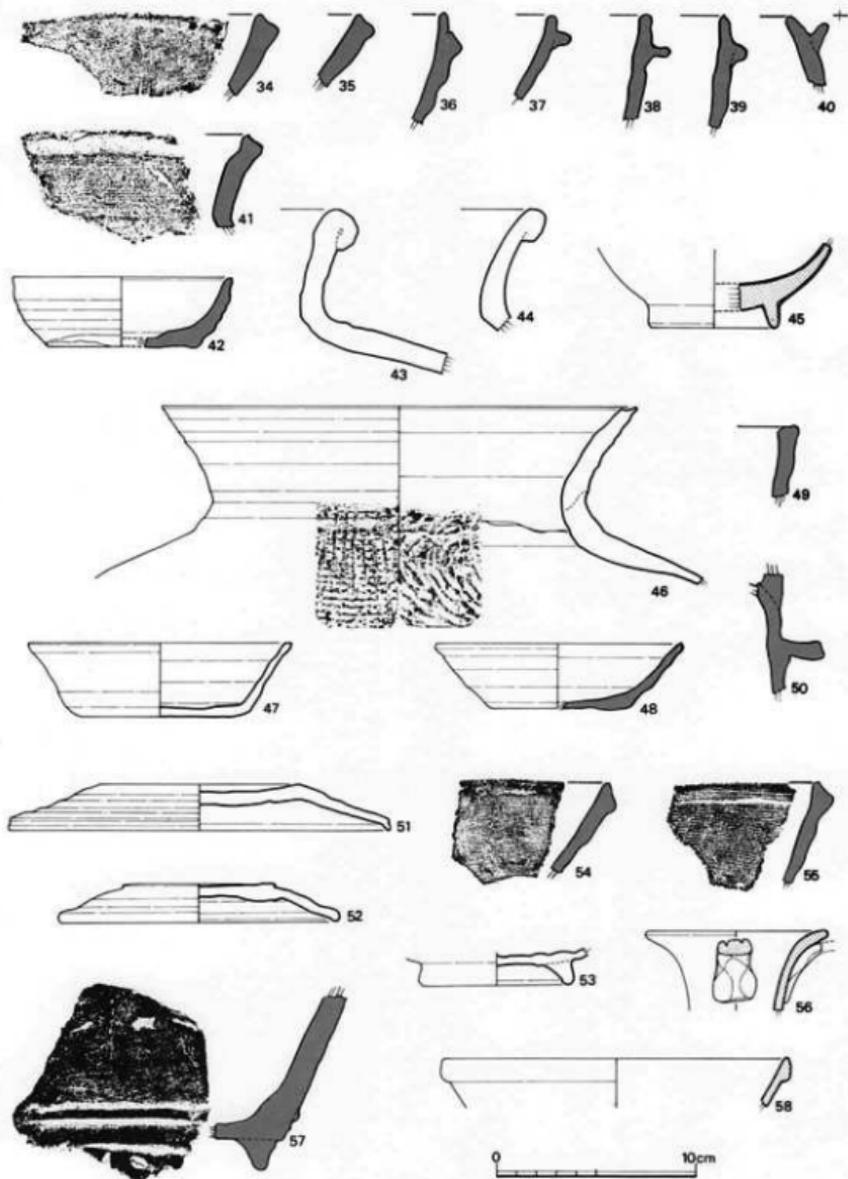
各地区から須恵器(51~53)、土師質土器(54~55)、瓦質土器(57)などの土器類、中国陶磁(56、58)、備前焼、伊万里焼、唐津焼などの陶磁器類、土製品類、鉄製品類、木製品類が出土した。51~55は露掛西地区出土で、内容的には第3・7・8調査区出土のものと同様である。56は露掛西第5調査区から出土の火舎で3~4の脚がつくようである。57は青磁水注の口縁部で、周辺では類例の少ない越州窯産と考えられる。58は白磁鉢で口縁部を肥厚させている。その他、細片ではあるが明の染付や白磁片が多数出土している。



第13图 露掛西第3-a調査区出土土器実測図(1) (1:3)



第14图 露伴西第3-a 调查区出土土器类图(2) (1:3)



第15图 各调查区出土土器实测图(1:3)

V ま と め

安芸国分尼寺跡の確認調査は、第3次の最終調査にもかかわらず尼寺跡の遺構及び寺城を確認するにいたらなかった。むしろ平安時代以降と考えられる多量の遺物と広範な遺構があきらかになり、この地域について今後、別の視点からの検討が必要になってきたといえよう。

国分尼寺についてはこれまでの3回にわたる調査が圃場整備のおこなわれる範囲に主眼を置かざるを得なかったこと、伝承地付近の宅地化がすすみ、きわめて限定された場所を調査せざるをえなかったこと等にもよるが、少なくとも伝承地付近の圃場整備が予定される地域については尼寺に関係する明確な遺構は存在しないとしてよいであろう。もともと尼寺跡伝承地の「尼寺」の字名は明治以後につけられた地名で、戦国時代の末頃に存在していたとみられる尼堂に対して、江戸時代になって国分寺に対応して尼寺跡が比定されて伝承されてきたらしいことが文書などで窺える。

以上のように尼寺跡について明確な成果を得ることができなかつたが、第1次調査の西楽寺地区では溝状遺構、基壇状遺構を確認し、須恵器類のほか木簡などが出土した。第2次調査の納力地区では溝状遺構、溜池状遺構、杭列などを確認し、須恵器、緑釉陶器、木製品などを検出した。また今年度は、露掛地区では平安時代～中世の建物跡・井戸・溜池状遺構・溝状遺構など多数を確認し、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・転用硯・木製品などが出土した。鷺田地区では平安時代とみられる建物跡を確認し、末成南地区では中世の遺物のほか平安時代とみられる須恵器類を採取するものが明らかになった。このほか国分寺跡の西方にも須恵器が散布する場所があるが、これらは国分寺跡に隣接しており、国分寺の成立とその後の歴史的経過と何らかの関連を有するのではないと思われる。このたびの調査は、国分寺跡の外辺部であり十分な成果を得るものではないが、この地域における古代～中世の遺跡のあり方の一端を窺うことができ、今後この地域の調査研究の緒となるものといえよう。この地域一帯は宅地化が進行しており適切に対処していく必要があるが、とくにこのたび諸事情により調査を行うことができなかつた尼寺跡伝承地北方や国分寺塔跡の西方などについては、尼寺跡の所在をさぐるうえでも今後とも注目してゆく必要があろう。



a 露掛西地区近景(西より)



b 同 上(東より)



a 露掛西第3 - a 調査区遺物出土状態(東より)



b 同 上(北より)



a 露掛西第3 - a 調査区建物跡(西より)



b 同 上堀立柱



a 露掛西第7-a 調査区遺構(東より)



b 同 上(西より)



a 露掛西第7-c, d 調査区遺構(北より)



b 同 上(南より)



a 露掛西第7 - b 調査区遺構(西より)



b 露掛西第7 - d 調査区1号井戸(西より)



a 平田地区近景(西より)



b 同 上第1調査区土壇(東より)



a 鷺田地区近景(東より)



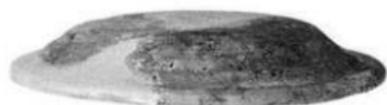
b 鷺田第1調査区建物跡(北より)



a 末成南地区近景(北より)



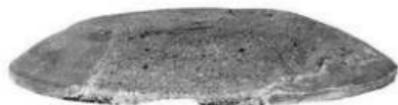
b 西楽寺地区近景(東より)



1



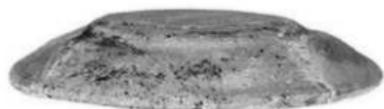
13



2



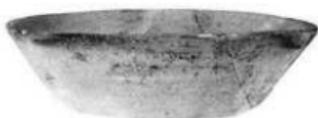
16



3



17



4



19



5



21



8



24



9



25

露掛西第3-a 調査区出土須恵器



27



28



29



30



31



32

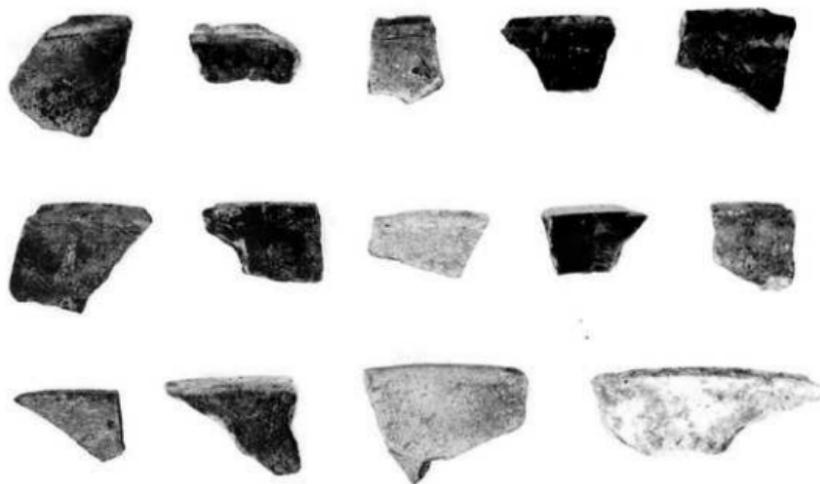


33

露掛西第3-a調査区出土須恵器，土師器



各地区調査区出土土師質土器



b 同上

昭和55年3月発行

安芸国分尼寺跡

—伝承地にかかる第3次調査概報—

編集・発行 広島県教育委員会

印刷所 朝日精版印刷株式会社